

第 7 回会議で出された主な意見

【「教育日本一」を実感できる北九州市の教育のあり方】

(各委員の意見)

- ・ 人格教育（徳育）を重視した教育日本一をめざすべき。
- ・ 人格形成とは学力、体力、徳力の 3 つの要素をバランスよく備えることであるが、現在の教育では学力、体力に比較して徳力があるそかになっている。
- ・ 徳育を日本一にするためには教師養成校を設立すべき。教師養成校とは、まず教師としての資質を備える為、自らが人格、徳性を磨いて、子どもへの教育、主に徳育の指導法を修得する場と考えている。特に新任の教師はいきなり現場に行くのではなく、この教師養成校を経て教育現場へ赴任することが望ましい。

- ・ 北九州を誇りに思う「北九州っ子」、その子どもたちが東南アジア、中国との交流のさきがけを担うようにしていきたい。北九州という個性のある子どもを育てるといふ点で打ち出すことができないか。

- ・ 現在、全国レベルでスポーツ、芸能、芸術などのあらゆる分野で活躍している人、これも北九州の教育の成果だと思う。単に学力、体力だけでなく、教育はもっと幅広くとらえるべき。
- ・ データというのは都合のいいものを集めようと思えばいくらでも集められる。教育日本一というのは、政治的スローガンとしてはきわめて優秀なものであるが、厳密につきつめていくと、教育を日本一にするということは、あまりなじまないのではないか。

- ・ 教育日本一は、中が決めることでなく、外から評価された結果で決まるものと思う。
- ・ 日本一ということを市民が実感できない状態になったときには絵に書いた餅にしかならないので、市民に実感させることが大切。そのためには、今までと違うとか、他と違うということが、一番市民として実感しやすいのだと思う。
- ・ 大人である私たちが子どもたちにこれからしていかないといけない責任としては、生きる力を育てていくことが一番大切。

- ・ 心の問題から追求していきたい。道徳が足りない。道徳で日本一を目指すべき。
- ・ いくら学科が良くても、心の豊かさがなかったら、年寄りを大切にしなければ、そこに心がなければ意味がない。

- ・ 日本一を目指すことはいい取り組みだと思う。目標に向かって頑張る中で、故郷、北九州を愛する子どもたちにしていきたい。
- ・ 学力の点数で日本一を目指すのは非常に分かり易いが、偶然ではなく、政令市、全国など、目標を明確にした上で努力し日本一に取り組むのであれば非常に価値がある。

あれもこれもではなく、何か一つ自慢できる子育ての方法で日本一を目指していくべき。

- ・北九州に子どもたちが住んでよかったと実感できることが日本一。子どもたち自身が、北九州で教育を受けてよかったという実感をもってもらえることが大事。
 - ・もう一つは、心の問題。体にも基礎体力が必要なように、心にも基礎体力が必要である。そういう意味では、文化・芸術の果たす役割はとて大きく、心を耕すことにつながると思う。
 - ・もう一つは、誰もが豊かな教育を実感できることが必要。教育の機会均等。子どもたちが、学ぶことは苦しいことではなく楽しいことだと実感できるという教育を目指すことが大切。
-
- ・「子育て支援日本一の街 北九州」を提案する。
 - ・子どもの生活リズムづくり(生活習慣)と家庭学習の習慣化というテーマの具体化を退職した先生方に考えてもらうというのが第一の提案。
 - ・第二の提案は、この活動は、市教委レベルではなく市レベル、つまり市民運動として発展させてもらいたい。この活動が全市的に進めば北九州の教育は一変する。まず、子育てが楽しく豊かになる。もちろん学校教育は生徒指導に要する時間と労力が激減し、質の高い教育が全市的に展開される。子育ての楽しさや豊かさを追求することは今日的な課題であり、子育て日本一を実感できるテーマと考える。
-
- ・目指すべき姿を子どもから大人までみんなが共有できるやさしい目標が必要。
 - ・数値だけではなく、全ての子どもたちが安心して学べるような教育環境の充実が必要であり、家庭、学校、地域、企業がそれぞれの役割を果たせるような環境の整備、地域社会全体の教育力が向上するような仕組みづくりなども含めて日本一を目指していくべき。
-
- ・教育日本一といわれると非常に大きな話だと思うが、保護者は目の前にいる子どもたちのことが最も気になる。挨拶ができない、身なりがきちんとしていないなど、現実を変えていくことが一番の関心。
 - ・学校も保護者も地域も一緒になって同じ問題を抱えて連携を図るべき。
 - ・「子どもを育てる10か条」は非常にいいものであるので、これからもまだまだ広めていくべきであり、こういうことも教育日本一になるのではないかと考えている。
-
- ・教育日本一のイメージは、低学年の子どもを持つ方は、基本的な学力・体力の定着や、子どもたちが学校を楽しんでいるかどうかといった点。
 - ・高学年の子どもを持つ方は、学習塾に通っている人の比率が高いためか、学力よりも学校生活をどのように過ごしているか、何らかの問題があったとき先生方がどんな対応がとれるか、また、先生と保護者のコミュニケーションがとれるかといった点。
 - ・特別な支援を必要としている方は、選択肢の多さ、きめ細やかな対応がしてもらえる

か、また、相談しやすい体制が、手続きが面倒くさくないかといった点。

- ・保護者の要望も、必ずしも同じ捉え方ではない。その点を踏まえて、項目別に目標を掲げられたらいいと思う。
- ・教育を行うのは大人。一番大事なところは大人。保育士や教諭、教員がいきいきとできる職場であること。大人がいきいきすると思いやりの心をもつことができる。
- ・まず、思いやりが大人の側にある。そういう社会をつくるのが一番。その結果、子どもの意欲、学力が育ち日本一となる。口で言うよりもまず姿を見せるということが一番大事と思う。
- ・人に対する思いやり、共感をもてる、それが基本的なもので、それができて日本一ができる。
- ・就学前の教育が重要。精神力、知恵など一生生きていける十分な力を身につけることが必要。
- ・就学前の子育てでは家庭力は非常に重要で、親が子どもと一緒に接することが必要。企業、行政の協力がないとできない。
- ・子どもは大人の真似をして発達する。大人が責任を持って行動しないといけない。子どもは親との接触がなければ育たない。運動をしなければ体力も発達しない。学力も体力も思いやりの心も大切。バランスよく発達する環境を整えることが必要。
- ・学力全国一はわかりやすいが、単なる試験で測定できる学力の改革では本質をついていない。
- ・子どもたちが自ら課題を見つけ、探求し、意見交換して、よりよい方向を見出していく、自分の意見を表明し、他者の意見にも耳を傾けるといったことが、人格の完成をめざすための基本。
- ・測定される学力の結果重視ではなく、子どもたちの可能性を引き出すものとしての教育、すなわち学びを通したエンパワーメントという意味での教育での日本一をめざすことが必要である。
- ・日本一を標榜するにあたっては比較可能なものだけではなく、北九州方式といえる特徴的な取組、視察が増えるような先進的取組、あるいは北九州の子ども達が転校した時に、北九州でやっていたことは他ではやっていないなと思えるような取組が必要。
- ・チーム指導体制など刺激しあえるような教職員の集団づくり、あるいは教員のゆとりの確保、身近な大人として教員が子どもたちにいろいろな影響を与えていけるような教員のゆとりや教育に専念できる体制づくりも必要。
- ・「子どもが学校に通って幸せである」とか「楽しく学校生活を行っている」とか「子どもも大人も学習や文化、スポーツ活動へ参加する割合が高い」といった目標で全国一であるということを目指すべき。
- ・子どもを真ん中にすえながら、大人も学び、市民が生涯にわたって人格の完成を目指すことを保障できる教育、市民が一丸となって一人一人を支えるような関係、多様な選択肢、機会があることをめざして教育の日本一を目指すべきではないか。

- ・学力や体力はかなり個人的な問題で、平均点が高い、低いということは市町村にとっては非常に大事ではあるが、保護者の願いは、わが子が安心して楽しく学校に通えるということや、自立する力をつけてもらいたいということなどであり、教育日本一というより教育環境日本一を目指すべきである。
 - ・そうした時に、北九州市は政令指定都市で非常に大きな都市なので、北九州市という枠でとらえるのは非常に難しい。北九州市内での分権、コミュニティやふるさとを実感するようなまちづくりという観点から、教育環境のエリアを狭く設定し、足元にすえる必要がある。
 - ・コミュニティスクールのように、中学校程度に予算、権限をおろし、それぞれの地域が知恵を出し、力を発揮しあうような環境、また自分達の声が届く、フットワークとネットワークができる環境という視点で、子育て環境、教育環境で日本一をめざしてほしい。
-
- ・調査だけではなく、分析と施策が必要。
 - ・調査の結果、北九州は政令市の中でも300万円以下の所得の方が4割となっている。政令市だけでは非常に低いレベルの生活水準になっているが、とりようによっては、かなりの教育水準を維持しているのかと思う。
-
- ・小学校教育のレベルで話をすると、基本的に自分の学校に、子どもたちが、保護者が、市民の方々が誇りを持てる、好きだと自信が持てる学校をつくることだと思う。
 - ・一つ目は、特色ある学校づくりの推進と充実。それぞれの学校の良さ、特徴、実践を市内外に発信することが日本一、誇りに思う学校づくりにつながる。
 - ・二つ目としては、日本一を目指すうえでは、学力の定着向上も必要。日本一にする必要はないが若干下回っている部分は、アップしていく努力が必要。
-
- ・いろんな調査結果の数値をとらえて日本一を目指すものではない。数値を他府県との比較ばかりで捕らえていくと、違った方向に行くのではと思う。
 - ・学校現場としては、ヒト・モノ・カネをもっと効果的に使ってほしい。もっと現場の教師がゆっくと余裕をもって子どもたちと接しながら授業を行えるようにしてほしい。
 - ・心の教育も重要。私の学校では、当たり前のことを当たり前でできる子どもを育てなさいと言っている。思いやりの心という「心の教育」が重要。
-
- ・親の教育に関する関心の問題。教育基本法でも親が子どもの教育について第一義的な責任を持つとなっていることから、親をどうするかということが一番の問題になる。
 - ・研修会に参加しない、チラシを読まない親をどう気づかせるかという点が問題であって、テレビやマスメディアを使って、子育てや教育に関するCMなどを常々流すといった対応が必要。市を挙げて、家庭、地域、学校、企業、行政が一つとなつて一つの方向に進まなければ教育日本一は達成できない。

- ・公立幼稚園では保護者と一緒に基本的な生活習慣をきちんと身に付けていく取り組みを実施している。
 - ・PTA の全国大会が行われた時「早寝、早起き、朝ご飯」を合言葉に、8園ある幼稚園、保護者が具体的な方法や手立てを考えた。ある程度同じ言葉で言い合わない、ばらばらのことを言ってもお母さん方の思いはひとつでも何をやっていったいいかわからないという問題がある。
 - ・北九州も何かスローガンを持って取り組めば、それに向かって幼稚園、保育園、小学校がそれぞれ具体的に何をすればよいかなどが明確になる。
-
- ・障害者福祉に関しては、北九州市はかなり具体的な取組が進んでいる。同様に教育に関しても、もっと具体的な取組を行う必要がある。
 - ・「適切な指導」と「必要な支援」ということが言われるが、「必要な支援」の方が表にでてしまい、適切な指導という面が陰をひそめているという課題もある。もっと適切な指導が行われる中で信頼される学校づくりを進めていく必要がある。
 - ・単に人の問題だけにとらえずに、教員の問題、施設設備の問題なども含め、新たな特別支援教育に適合できるよう、今ある仕組みを考え直していかなければならない。
-
- ・倉橋惣三先生は、「現代社会はいかなる人間を求めているか」ということについて、「神経が強靱で疲れず、自己の信念に従って初心が貫ける人間」と書いている。
 - ・いくら競争して学力の点数があがっても、知識を注入するだけではだめなのではないか。
 - ・子どもが人間を信じる心を育てていくことが大事である。また、生活習慣についても、指示待ち症候群ではなく、自分で目標を立て、そこに向かってチャレンジする意欲を育てることが大事である。
 - ・日本一というよりも、「現代社会はいかなる人をもとめているか」という所に焦点をあてる必要がある。

【教員がより力を発揮し教育に専念できるあり方】

（教員の勤務実態に関する視点）

教員は、年間行事、対外活動、各種調査、保護者対応など多くの実務を行っている。人を増やすことや、学校現場、教育現場における仕事内容の精選を、ぜひ行う必要がある。

教員の勤務時間はどれくらいなのか。残業もあるとのことだが、民間企業も労働条件の実態は厳しいものがある。学校の教員ももう少し大きな視点から職務を捉えていく必要がある。

教員も労働時間の中でどれだけ教育効果を上げていくかという前提がある。基本的に学校教育を8時間労働の中で教育効果を上げ目的を達成しようとする時に、その時間以外の時間を使わなければならないということに関しての分析は課題として残る。

仕事の重要性は時代とともに変わる。昔はとても重要であったが今では重要でなくなっているものもある。教員も作業時間分析というものがされているかどうか分からないが、作業時間の分析のプロに一度見てもらい、客観的に評価してもらうことも必要。

(教員が子どもと向き合う時間の必要性に対する視点)

学校の教員は、以前と比べると雑務が多すぎる(雑務以外も含めて)ことから、子どもと向き合う時間が取れない現状にあり、これが一番の課題である。

新聞情報だが、宮崎県小林市の教育委員会にスクールサポートセンターという制度がある。また、学級担任がしていた事務を事務職員が共同で処理する仕組みを作っている。北九州も教育日本一を目指すならば、そういう面についても配慮することが必要。

保護者と教師の関係も昔と変わっており、学校において、各エリアの中で1人か2人、家族との対応などにアドバイスしてくれるような人がいれば、もっと現場の先生が力を発揮できるのではないか。

優れた教員を増やし、教員のモチベーションを高めるためには、いかに子どもと向き合う時間を確保するかが重要であり、教員が個人で行う事務処理等を補助するような仕組みが必要ではないか。

(企業が求める人材との比較に関する視点)

いい会社 = イキイキした人材で溢れる会社でなければならない。北九州市の教育に対して、生き生きした教育を実現したいということがあったが、企業でも社員一人ひとりが生き生きとして働く会社を目指していく必要がある。

企業では“人間力”といったところを非常に重要視している。人間力とは、能力やスキルなどの単発の能力が高いことではなく、「この人なら信頼できる、ついて行きたい」と思わせるような「人間としての総合的な力」といったものである。

昨今、一番必要になってきているのは「考え抜く力」と「自己マネジメント力」である。

「考え抜く力」とは、現状を当たり前と思わず、より良くするための解決方法を考える力のことであり、課題発見力、計画力、創造力といった要素である。一方、自己マネジメント力としては、「責任感」「リーダーシップ」「顧客指向」「現場主義と改革意識」の4つを求めており、この4つは、“人間力”に大きな影響を与えるものである。

やはり教育は人なりであり、人材の確保だろうと思う。「この人なら信頼できる」「この人についていきたい」という教師をどうしてつくっていくのかというところが、テーマになるのではないか。(人材に関しては)教育と企業の方向性というのは、意外と変わらない。